

5.7. 「ウィーンの風 (番外)」

オーストリアの楽しみ方！

(番外編)



離任後に書き置いた記事である。話題になるかと暖めていたものもあるが、調査未熟の素材もある。回想文集の編集期限間近の2002年12月、パーティ席上でこのシリーズが「面白い」と言ってくれる顔見知りの声に励まされて書き置くことにした。掲載は離任(2003.4)以降になるので「匿名で」と依頼したが、知る人は私が筆者とすぐ分るだろう。この投稿も振り返れば楽しかった。読者の反響がこんなに嬉しいものかと作家の気持ちが出たような気分だった。

[小さいことも悪くない \(その1\)](#)

[小さいことも悪くない \(その2\)](#)

[列車旅行も悪くない](#)

[Mariazell](#)

[ウィーンのいけない話\(1\)](#)

[ウィーンのいけない話\(2\)](#)

[「食」のカルチャーショック \(食文化考1\)](#)

[「食」のカルチャーショック \(食文化考2\)](#)

[Wie geht's?](#)

[日本語は最高の酒の肴：在澳某県人会](#)

21) 小さいことも悪くない (その1)

「大きいことは良いことだ」の高度成長時代に生きてきた世代にとっては、その経済構造が失速しても若い頃の感性は容易に消えない。が、一寸待てよ、とウィーンに来て実感した、体感した、小さいことも悪くないと。小さいことの良さを活かすとはこういう事かと。

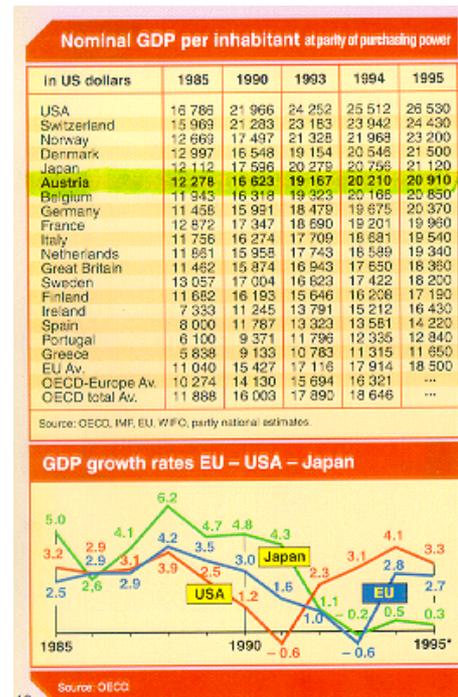
大きいことの良さは何だろう。世界先端のモード、商品、イベント、最新情報を伝える多様なメディア、あらゆる職種が選べる、いながらにしてなんでも手に入る、グルメができる、見れる等々。大きいことの利点も確かに多い。

オーストリアは国土の広さが北海道ほど（1／5強）、総人口は大阪府程度（1／20強）。「小さい」国だろう。山岳地帯は日本と同程度、国土の七割ほどを占めている。その土地はやせていて農業には適さない。自然資源が豊富にも見えない。その国が「豊かさ」を実感させる。日常生活の中で100ユーロ紙幣と10000円紙幣一枚のなくなる時間差（つまり実質価値感差）はどこから来るのか。手元の政府刊行物に依ると一人当たりGDPは日本と肩を並べEU内でも優等生である。なぜなのだろう。

宗教的背景から日曜日が休業なのは当然として、数年前は土曜日も多くは閉店、スーパーも昼で閉店した。食料品等を日曜日に入手できるのは主要鉄道のターミナル駅など、今でもウィーンで数店である。夕方の閉店も早い。それ以降開いているのはレストランだけである。そのレストランは不思議に閑散としている。「この客数で商売成り立つのか」と訝るほどである。

「客の回転」という雰囲気は全くない。夏時間帯の期間は、夕方になると街中にも街外れの散歩道にも人が溢れる。家族連れが多い。「いつ仕事をしているのだろう」と思いたくなる。

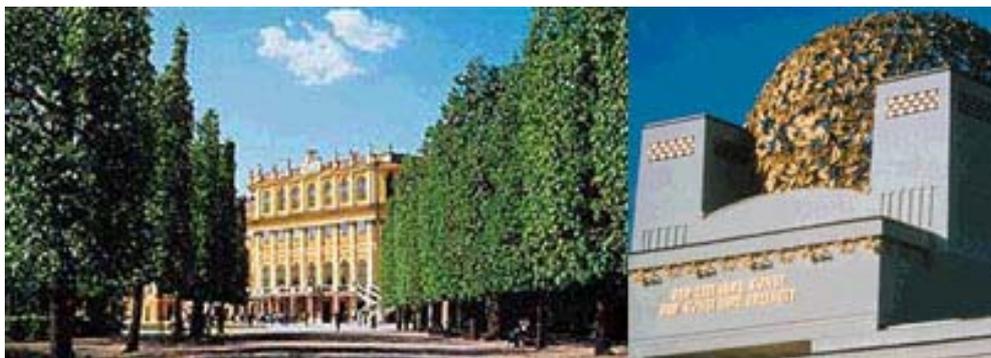
「働かない」と言いたいのではない。「この程度の仕事でなぜこの『ゆとり』なのだろう」と不思議なのだ。「仕事をしているように見えない」人達が広くて快適な家に住み、庭付きのセカンドハウスで長い休暇を楽しんでいる。乗り物も空いていて安い。市内は一律料金で乗り放題。朝夕の一時を除けば必ず座れる。ハイキングで利用する長距離電車でも座席に困った記憶はない。高速道路はEU加入のため有料化されたが一律料金。市内交通と同様、料金徴収用のゲートも係員もない。経費はかからないし、交通の流れも円滑になる。小さいことの良さだ。空港からの距離は短く、通勤時間は概ね30分以下。通勤途中駅の乗り換えも短時間で済む。生活必需品はミニマムの中間経費で消費者に届いている。一寸足を伸ばせば都会を離れた自然がある。



22) 小さいことも悪くない (その2)

明治維新で東京遷都を進言したのは若い日の前島密。郵便制度の確立でも知られている。終戦直後派ならかつての一円切手の肖像をご記憶の方もおいでだろう。地形の限られた京、大坂より発展ポテンシャルのある広大な関東平野を控える江戸を新首都にするよう西郷、坂本らに進言している。その後の発展がそれが正解だったことを示していると言って良い。国連への拠出金で言えば20%も分担する「豊かな」日本である。

それに比べて「貧しい」はずのオーストリアでなぜ日本以上の「豊かさ」を感じるのだろうか。一言で言えば経済の仕組みの違いだろうが、それはどういうことなのだろう。建築物の寿命が日本に比べて格段に長いから、その維持費用が少ないだろうことはわかる。が、住宅の内装には誰もが手間暇をかけている。市民の多くはその内装を自分の手でしている。このように「身のまわりのことは自分でする」精神が、そしてそれが出来る社会構造が、生活をしやすくしているのかと思う。家の造作に限らず、古いものを大事にし、使い捨てせずに靴でも傘でも旅行カバンでも修理しては使う。日本では今や珍しい修理店が営業し、簡単な工作室を持っている個人も少なくない。修理道具も売っている。日本でなら首を傾げるような「がらくた」が堂々と蚤の市店頭に出る。あれは再利用目的なのか、装飾品なのか。



人工音の少ない、そして広告塔、瞬くネオンのない、立て看板も控えめな街が「落ち着き」を齎してくれる。また、高さ、色調の調和が取れた建物も一役買っている。それを維持するための多少の「不自由」は税金として受け入れている。それが街の美しさを保ち、「豊かさ」をもたらしてくれていると自覚している。彼らも「無手勝ではない」のだ。

いまさら、「東京を小さく」などと短絡するつもりはない。が、「豊かさ」開発の参考になる点はいくつかではないか。日本だって美しい自然はあるし、大都会の殺伐とした対人関係が本来の日本人の性格でもない。ときに大小の利権亡者（平たく言えば「たかり屋」）のいることが嘆かわしい。最も学ぶべきはEUの実験で見られるように、近隣諸国との分業をうまく成立させ「何でも自国で」とは拘らない国としての姿勢と「自分のことはなるべく自分で」と一見相反する個人レベルの姿勢に思える。個人的な近視眼的観察かもしれないが、市民感覚としての読者のご意見を聞いてみたい。投書を期待したい。

23) 列車旅行も悪くない

旅は誰にも楽しみである。皆さんの主な移動手段は何だろうか。多くは車だろう。が、列車旅行も楽しいと言う話。運べる荷物に制限はあるが、疲れは少ないしその土地土地の人々の生活が垣間見えて面白い。私自身は日常の近場ハイキングはもちろん、多少の遠地旅行も OEBB (JR 相当) を愛用している。新幹線のスピードに慣れた体には「遅い」と感ずる。「狭軌の日本と違い標準軌の筈なのに」と当初は訝った。が、慣れてみるとそれも悪くない。座席は概ね広くて空いているから楽しめる手段である。



VORTEILScard という OEBB の優待券は遠距離切符が半額になる。約 10000 円。写真を持参すれば誰でも買える。ザルツブルク、インスブルックに一年間に各一度往復すれば元が取れる値段である。最近 (2001?)、割引率が窓口か (45%) インターネット経由の発券か (50%) で僅差は生じたが概ね半額になる。家族用は子供連れが条件だが、三人目以降は無料になる。他に、若者用、シニア用 (男 65 女 60) や他国の鉄道も 25%割引になるオプション等もある。山岳ケーブル、湖上船割引等の付帯特典も多い。

座席指定料も安い。満員列車に出会うのは稀だが、時間の決まった長距離移動なら予約が無難である。ウィーンからチューリッヒやミュンヘンまでが 500 円以下で済む。座席単位に予約区間の紙片が掲示される。掲示がない座席は自由席である。なお、長距離列車は箱毎に行き先が異なる場合が多いので予約なしの場合は乗り間違えないようやや注意を要する。

ヨーロッパ内の鉄道網は相互につながって誠に便利である。ドミノ切符といういわば周遊券がある。旅行目的先の国別に三～八日の有効日数で買える。使用日が不連続でも良いところが嬉しい。30 日の間の好きな日に使えば良い。滞在型休暇向きだ。途中経路の国境までも割り引きが効く。

寝台車も快適である。シャワー・トイレ付きの個室、最大四床までの小グループ用、鳩小屋形式の相部屋、リクライニング座席車等の種類がある。相部屋は原則男女無差別、仕切りのカーテンもない。種類に依って前掲の



VORTEILScard の割引が効く。多くの場合、簡単な朝食が付く。寝る前に車掌が注文を取る。同時に旅券も集めていく。税関申告書と合わせて国境での手続きを代行してくれるので起きなくて済む。数年前ポーランドへ旅したときは国境毎に深夜起こされて参ったことがある。今もそうだろうか。

長距離列車には食堂車はもちろん、子供用遊び場、自転車置き場を連結した車両編成も多い。食堂車にカレーやラーメンがないのは残念だが、混んだ列車の場合は座っただけいるのも大概許される。

24) Mariazell

ウィーンの南西、直線で約100kmの所に Mariazell という街がある。大きな教会があり、毎年八月半ばのマリア昇天祭（祝日）には多くの巡礼者が夜遅くまで手に手にロウソクを持って教会に詣でる。ウィーンからも多くの人が出掛ける。かつてのお遍路さんはもちろん徒歩である。東西南北からマリアツェルへ通ずる幾つかの古くからの巡礼コースがある（広域自然歩道WWW06）。二年前の夏、ウィーンからマリアツェルまでを歩いた。WWW01沿いにハイキング仲間と山越えの快晴の六日間、全行程約200kmだった。本稿はその旅日記ではなく、マリアツェルの名の由来について。

村の起源は12世紀。マグナスという僧が召し使い一人を伴って布教の旅をしていた。ある日、二人は人里離れた山中の一軒家に一夜の宿を乞うた。実は盗賊の宿だった。夜半もマントで被った物を大事そうに手離さないマグナスを見て盗賊は「きっと価値ある宝物に相違ない」と考え「それをよこせ、さもなくば殺す」と脅した。マグナスが持ち歩いていたのは木製の小さなマリア像だった。



が、マグナスが見せたそのマリア像に盗賊は打たれたようにひれ伏し、二人を解放した。二人はその家を出て山中で夜を過ごした。明け方、マグナスの夢枕に女性の声で「マグナスよ、起きよ、そして急いで行け」と言う。その声の主を確かめようと空を見詰めると、マリアは乳児を腕に抱えて三日月に腰掛けていた。マドンナがあまりに美しいのでマグナスは我を忘れていた。マリアは「早く、早く」とマグナスを急かして森の向こうに消えた。マグナスと召し使いは急いで山を下りて麓の村に入った。ところが、ここも盗賊達の巢窟だった。盗賊達は二人を見つけて襲ってきた。二人は追いつめられ逃げ道もふさがれてしまった。マグナスは絶望的にマリア像を高々と持ち上げて祈った。その瞬間、目の前の岩に二人が通れるだけの隙間が一瞬に現れそこを抜けると二人は深い峡谷に出た。奇跡だった。峡谷に住む多くの樵が二人を歓迎した。マグナスは因縁のこの地に落ち着くこととし、マリア像のための小さな祠を樵たちに建てさせた。「マリアのための部屋（ツェル）」——マリアツェルの名の由来である。

以来ボヘミアやハンガリーの王侯が多く帰依し、特にオーストリア皇帝から重きを置かれた。もともとローマ風だった教会は14世紀に大きくゴシック様式に建て直され、17世紀にはバロック風となった。ハプスブルグ家の結婚式がここで行われ、女帝マリアテレジアが初の聖体を受けたのもこの街らしい。大きな祭壇は17世紀に造られ、銀製の Abschlussgitter はマリアテレジアの寄贈である。

近郊には眺めの良い手頃なハイキングコースも多い。まだ行っていない人にはぜひのお出掛けを勧めたい。

25) ウィーンのいただけない話(1)

本コラムは「オーストリアの『楽しみ方』」。そこで天の邪鬼は閑話『いただけない話』二題。先ず(その1)は独断と偏見の眼鏡で見たウィーンのネガティブな点を幾つか。

ネガティブと言ったら苦情が出るかも知れないが抵抗を感じるのが街中での男女のキス。老若を問わず、公道、車内、劇場ホールどこでも自然に愛情を確かめている。かなりの満員電車の人込みでも見る。目前でやられて目のやり場に困る。見て見ぬふりするのに苦労する。子供も小さい頃からの習慣で別に面白がる風もない。が、日本人で、特に私の年代には抵抗感と言うか、羨望感と言うか。

歩きながら食べている姿もよく見る。通勤車内でサンドイッチを頬張るビジネスマンやキャリアウーマン、昼日中ピザをぱくつく若者、夏にはこれにアイスクリームが加わる。老若男女を問わず大きな舌をペロペロ。「いい年をして」とか「若い女が」等というのは野暮なのだろう。たばこの投げ捨ても多い。しかも殆どは火を消さずに投げ捨てた。男も女もだ。石造りの街だから火災の恐れがないのかもしれないが、感心できる話ではない。歩きながらの煙草は、「自分は新鮮な空気、煙は後ろの人に」と言っているようで不愉快である。

最後は落とし物。情緒ある観光馬車フィアカーはウィーンの街の名物。歴史があって営業も厳しい許可制のこの観光馬車。難点は馬の落とし物。シーズンになると街中はこれで溢れる。袋をつけて自己回収



の努力もしているが万全ではない。犬の分も合わせて落とし物を効率的に収集するための専用ロボット自動車を開発しようと市はかなり投資したようだがついに断念したと聞いた。

(余談) このフィアカーに関して面白い実見談を一つ。所はウィーンならぬモロッコのある街。時は朝まだき暗闇。朝の散歩にホテルを出ると、街角の客待ちタクシー列の後ろにフィアカー数台が並んでいる。客の少ない早朝なので寝ているのか御者台に姿はない。馬だけがおとなしく整列している。と、先頭のタクシーが運良く客を得たらしく走り去った。後続の二、三台がにじり進んで間を詰める。眼を見張ったのはそのあと。先頭のフィアカーが御者もいないまま前の車との間を詰めて止まり、馬は何事もなかったように首から下げた袋の飼料を食べていた。後続の一、二台も同じ。訓練か、習性か。ウィーンのフィアカーはどうだろうか。

26) ウィーンのいただけない話(2)

閑話その2は笑えない話

「小さい子供は人形のようにかわいいのに」とは耳にも口にもする。言うまでもない、大きくなった人を揶揄している。観劇での前席にこんな人が孔雀の尾のような髪を上げて座ると吾が小身を嘆きたくなる。身長より明らかに胴回りが大きい人も少なくない。どちらかと言うと女性に多い。しかも重心が高く、足は細い。「大きすぎる」ための悲劇もまま耳にする。

ある冬、少し遅く帰宅した独り住まいの老婦人、折りから降り積もっていた薄い雪に足を滑らせて玄関先で転倒した。自力で置きあがれない。裏返されたカメの様子だったらしい。降り続ける雪の中で奮闘の一夜を過ごしたが、翌朝隣人に発見された時には気の毒に既に凍死していた。

「重量超過」を理由に、航空会社から搭乗を拒否された男性もある。別の男性、自重を支えきれずアパート二階の自宅から出れない。病になったが救急車部隊も手が出ず消防自動車と山岳レスキュー部隊の登場となった。若者六人掛かりで運び出した。

別の中年婦人、路上で転んで膝を痛めて動けない。「幸い」夏の日中だったので、老婦人のような難は免れたが、この場合も消防自動車とレスキュー部隊の登場となった。救急車の搭載制限を遥かに越える重量だった。普通の人が、つまり鍛えて大きくなった関取でもない人が、飲食だけで現役時代の曙や小錦に匹敵する体重になったら深刻である。



レディファーストが徹底している。電車の乗り降り、レストランの配膳順序等概して好感が持てる。混んだエレベーターが問題。途中階で乗ってきた男性は入り口付近に立っている。降車階に来てその男は奥の女性が外に出るまで待っているのである。これはレディファーストなのか交通妨害なのか。

ところでビュロクラシーはどこにもある話だが、．．．。自慢にはならないがUバーン内で夕方スリに遭った。職場に置き忘れたのではないことを翌朝確かめてから近くのポリツアイに届けた。「事故証明は明朝二階の**部に取りに來い」と言う。翌朝指定の時間に行くと「まだ出来ていない、午後出直せ、指定の時間は下の部署の希望だろうが私の約束ではない」とおっしゃる。午後出直して驚いた。「数日前からの新規則で事故証明は現場の管轄署で発行する、この場合は乗車駅か下車駅の管轄になる、どちらかは『自分で』調べて行け、電話番号はこれこれ、．．．」と悠然としている。「謝る」という文化はない。「素直に」謝ることで「赦す」日本文化と異なるのだから仕様がな。が、割り切れない気持ちが数日残った。

27) 「食」のカルチャーショック（食文化考1）

といっても大仰な話ではない。身近で感じた「食」の話である。だからこれは話の肴であって真面目な議論ではない。当地での「食の楽しみ方」は如何したものであろうか。

戦後育ちの筆者には（筆者の顔が浮かぶ？）食料は宝だった。初の外国生活で「食べ残す」常態に眼を見張る。しかもそれが「上品」なのだとは。同じその国で「煮たトマト」に会う。トマトとは水温で冷やして生で食べる物と思っていた。そう言えば林檎もクックされて出てきた。後年バナナの天婦羅に出会った時以上の驚きだった。野菜も果物も「新鮮」であるより「傷んでいるのが普通」の食文化だった。

「活きた新鮮な鯉を」と勧められたニュルンベルクのレストラン。まさかとは思いつつ「鯉こく」「鯉の洗い」を想像した。が、出てきた鯉は油っぽ衣付き。海のないオーストリアでも事情は似て魚食文化は貧弱である。鮭以外は大概揚げ物である。「焼き魚」にも出会うこともある。中では鰈、鱒が多い。やや田舎のガーストハウスでは「自家産鱒」に出会うが、「取れたて」なのだからもう少し工夫は出来ないのかと不満が残る。「煮魚」に出会うことは滅多に無いが一、二度はある。確かブラウと称した。種類も味も豊富なスープやケーキに注ぐ情熱と研究心で追求すれば、と思ってもそれは無い物ねだりである。



やはり肉文化である。生半可で論ずる気はない。それなりに美味しいが連日は喉を通らない。年齢、好み両方が原因だろう。ハイキング先のガーストハウスでの昼食、皿からはみだしそうなヴィーナーシュニツェルを平らげる女性に私は感嘆する。こちらの人にはやはり美味しいのだろう。気付くのは甘みが薄いこと。そう言えば日本料理は結構砂糖を使う。食後に苦みの茶を好む日本に対し、甘いケーキを必要とするこちらはこの主食の甘味の差に依るのか。

それより私的には、ピーマンやズッキーニ、ナスビが生でサラダに使えるのが新発見だった。しかも結構いける。知ってから愛用している。旅先でも助かる。田舎育ちがなぜ知らなかったのかと不思議である。果物も結構豊富である。輸入物が多い。山菜ではアイアシュバンマールという茸が気に入った。確か自然採取でしか手に入らないから、市内よりやや奥まった山中のガーストハウスが良い。

食の話題ではデザートを避けては通れまい。が滅多に口にしないので触れない。割合穏やかなアップルシュトゥルーデルでもその半分が私の喉を通ってくれない。ましてザッハトルテにおいておやである。

読者の皆様はどんな経験をお持ちだろうか。

28) 「食」のカルチャーショック（食文化考2）

日本で発明された俗称「三大洋(風)食」と言うのがある。日く、トンカツ、カレーライス、ラーメン（これ洋食？）。私は何れも好きである。オーストリアの電車の駅にもこんな「立食店」があれば良いのに。

外に出て始めて口にすることも少なくない。鳩は平和の使者。食べるなんてもっての外、と思うのだがエジプトでは人気の料理。接客用でもある。犬を食べる、とこっちの人は中国人に眉をひそめるが牛豚類の四肢類を食するのと何が違うのか。もっとも中国人は「足（脚）」のあるものは（机以外は）何でも食べる」とも言われるが。私はタイで口に



した。牛豚類は家畜だから許される、と言う人がいる。がそれらを神聖視する宗教、人達もいる。「文化は多様」である。自分の文化、論理で他を排除しない様にしたい。良い意味で他人は他人、我は我である。オーストリアに来て始めて口にすること、食材は何だろう。

私は馬刺しが好きである。生姜の甘垂れを好む。山から降りてきて牧場に通りかかると「馬刺しが歩いている」様に見える。がその話題は口にしない。犬以上に馬を慈しむ社会である。「馬を食べる」などと言うと非難の視線が見え見えだから。

動物愛護を標榜する「毛皮反対派」がいる。多くは牛豚類を食する人種に属する。彼らはベジタリアンだろうか。ベニスの商人ではないが、皮を取らずに肉だけ食せるとは思っていないだろうに。そのベジタリアンの多くも魚類は良いと言う。分らない。が、とにかく新鮮な魚を美味しく賞味できて日本人であることを嬉しく思う。ある職場の人が日本で魚市場を訪れて、「蠅の飛び交わない魚」に首を傾げたと聞いて「文化、習慣の違い」を印象づけられた。そんな人に「取れたての秋刀魚、鯛、鰹、蛍烏賊」を食べさせて見たい。いや、こっそり自分で食べるか。

「食文化」は多種多様である。私は料理の良し悪しは言わないことにしている。好き嫌いは言う。人に依って好き嫌いはあっても料理自体に良し悪しはないと考えているからである。昔、日本のある田舎の料理屋で柳川鍋を取った。大き目の泥鰌にやや抵抗を感じた。入ってきた客に「柳川鍋はどうももう一つ」と言ったら、その人はそれが大好物の地元の常連客と聞いて恥じ入った。それ以来料理の良し悪しは口にしない。公務で中国へ行った時、久しぶりの醤油味に私は幸福であった。同行のイタリア人に声を掛けると二日目には「ピザが食いたいので」と断られた。彼にはその味が落ち着くのだ。

29) Wie geht's?

どこの土地であれ現地の楽しみを少しでも多く享受するには現地語である。つまりここではドイツ語。若い頃努めて聴いていた米軍のF E Nで"A little language goes a long way"と始終言っていた。「片言でも覚えれば楽しみが倍加する」とでも駐在軍属に勧めていたのか。尤も「monolingualの別名はAmerican」と言うジョークもあるが。

英語が幅を利かす職場ではドイツ語なしでもやっていける。身近の仲間で「日本語で通す」と宣言したのがいた。「覚えたドイツ語は *Noch einmal*(あれをもう一つ)だけ、これさえあればレストランでは隣席の人の皿を見て注文できる」と自虐したり(実は英語は達者なのだが)、「食事の後帰れないから *Zahlen, bitte*(お勘定!)だけは覚えた」と言う人もいた。

が、少しでも現地の料理を美味しく食べたい、一人で自然を歩きたい、現地の人と親しく付き合い、時には呼んだり呼ばれたりの関係を深めたい、となると言葉が欠かせない。家族を伴わない私でも飲み友達と付き合うには役立つ。と言う訳で職場の語学教室に通った。

ドイツ語なんて無しで済ませる気なら日常生活は無しで済むし、日本に帰って特別役立つとも思えない。が、やるなら今が好機と思ってやってきた。若い頃と違い進歩は遅い。それでも続けているおかげで少しは上達した。「*Schmeckte gut* (美味しかった)」とお世辞にでも言えば店の人は喜んでくれるし、「*Weniger Salz* (塩分少な目に)」と注文も出来る。スーパーで勘定間違いに抗議できる場合もある。確かに「片言でも生活を助けてくれる」である。

が忘れるのも早い。聞いた単語が右から左へ抜けるのは始終だし、意味を調べて辞書を閉じたらその意味を忘れていたり、辞書を手にしたら調べるべき単語を忘れていたりすらした。まじめに勉強したつもりでもちょっと日本に帰って日本語にどっぷりして戻ると殆どゼロになっている。悲しいものだ。

ま、それにしても少しは知っていた方がやはり助かる。「語学は苦手」「フランス語ならともかくドイツ語はねー」と言う人もおいでかもしれない。無理をする必要はない。余暇の積もりでやれば良い。この国では犬でもドイツ語を読めるらしいから。(写真：スーパー店頭の犬向け「入店お断り」標識)「私が見張っていますよ」と言う犬からの語り掛け標識も個人宅玄関先で見かけた。最近日本で「犬語翻訳器」が市場に出たと聞いた。ドイツ語も解するのだろうか。



30) 日本語は最高の酒の肴：在澳某県人会

県人会なんてあるの？と思う人がいるかも知れない。少なくとも身近に一つある「某」県人会。やはり故郷を共有する仲間で袴脱いで親しく日本語で語り合いたいからだろう。そこには「同じ日本人」以上の感覚、「同県人」意識がある。

ところで私がその県人ではない。女房の故郷県人会である。ある年、その発会式の案内が届いた。「本人不在」と返事すると、「代理で」と招待された。指定のホイリゲに行くと、「親睦目的で会員の枠は...」と発起人の挨拶。「純粹会員は本県出身で...、家族は家族委員、他に本県の山や温泉が好きな人は賛助会員として...、何でも良いから本県に関心ある人は一般会員として... 云々」要するに誰でも良い、集まって楽しくやろう、という会らしい。

会長は現職（前職だったかな）の大使。他に音楽学生、音楽家、ジャーナリスト、国連職員、引退した元ビジネスマン等色んな人がいる。請われて「私は... の出身で、主人は今ウィーンで... しています云々」と自己紹介。それ以降、時に本国同県の担当が顔を出したり、欧州他国の在留者と交流したりで参加者は「おめえさんも**の生まれかあ、気持ちわかるがあ」とやりあっている。日頃横文字で生活していると時に本来の言葉ではしゃぐのが楽しいのだ。

前回、「楽しむためには現地語も」と背伸びをしたが外国語は所詮外国語。心底から楽しみ、リラックスできるのは自分の育った環境でだ。折角の温泉も下着付きでは今一つである。外国ではせめて自国の言葉の雰囲気である。私的には「あの大味なウィナーシュニツェルも醤油とならなあ」とか「同じワインでも日本語で呑むと美味しいね」と言いつつ過ごしている。日本でほどは「何でもあり」と行かないところが、限られた範囲での楽しみを味わえているのかもしれない。格好付けて言えば「知足」である。



肩肘はらずに周り付き合おう。長い人生、色んな人と出会うのだ。出会いは輪を広げ、新しい世界を齎してくれる。袴脱いで、自分の言葉で、（それがままならぬとも）気持ちで接し、後日また会いたいという友人をできるだけ沢山作りたいものだ。